

## 「遠い隣国：ロシアと日本」を紡ぐ糸

水野庄吾

2020年4月、本学にロシア語学科が開設された。これに関連し、本学図書館では「鎖国時代からの日露交渉史料と同時期のロシア文学」と銘打った貴重書の展示会の開催を予定している。展示会の銘の通り、本学図書館は、日露交渉史料を所蔵している。その史料からわかるのは、今日、「遠い隣国」などと呼ばれることのあるロシアとの関係構築の様子である。言葉も文化も違う、辞書もなければ、地図もない、そんな2国間の関係構築がいかに骨を折ることであったかは言うまでもない。真っ暗闇の中で、針や糸も持たず、正確かつ緻密に2枚の布を縫い付けるようなものであろう。

個人的な話ではあるが、私には、有り難いことにロシア留学経験がある。この経験を文字通り、有り難くする要因として、いかなることが挙げられるだろうか。経済的な問題や時間的な問題はもちろんのこと、忘れてはならないのが2国間関係である。経済的、時間的余裕がどれだけあったとしても、2国間の関係が劣悪であれば、通常、留学どころか旅行すらも実現が叶わないものである。そのように考えると、こうして留学をすることや何の不安もなくロシア語を学習できる今日の情勢に感謝しないわけにはいかない。このような情勢があるのは、他でもなく、先人たちが苦労を重ね、今日まで「遠い隣国：ロシアと日本」を目には見えない糸で紡いできてくれたからこそである。糸は、時に、古くなることやほつれそうになることだってあるだろう。糸が1度切れ、離れ離れになった布をはじめから縫い直すことは決して楽なことではない。古くなった糸は取り換え、ほつれそうな箇所は縫い直すほうがずっと良い。今日まで紡がれてきた日露間の糸を我々の世代で切って

しまうわけにはいかない。先人たちが紡いできてくれた糸を引き継ぎ、我々が新たにそれを紡いでいく針にならないといけないのではないだろうか。

そのためには、一体どのように糸が結ばれてきたのか、ロシアとはどのような布なのか、ロシアは日本のことをどのような布だと見なしているのか等の情報を把握する必要があるだろう。本学図書館には、そのような情報把握に必要な資料が、十分に揃っている。先述した展示会において、展示されるものだけではない。言語、文学、芸術、政治、経済に至るまで、様々な分野についてのロシア関連書籍がある。さらに、それらは日本で出版されたものだけではなく、本場ロシアで出版されたものからアメリカ、イギリス等で出版されたものまでも豊富に所蔵されている。是非、実際に展示会や本学図書館に足を運び、この恵まれた環境を実感していただきたい。

本学図書館の所蔵資料が今後の日露関係の役に立つこと、そして日露の懸け橋となるような人材育成の一助となることを願うと共に筆者自身も本学図書館所蔵資料の恩恵に預かることで、今、日露を紡いでいる糸を引き継ぎ、さらにそれを紡いでいくことのできる1本の「針」となれるよう、日々、努力を重ねていきたいと思うところである。

最後に、本学図書館には故・木村汎先生からの寄贈図書が多数所蔵されている。先生のご著書『遠い隣国：ロシアと日本』からタイトルをお借りすることで、ここに先生への感謝と尊敬の念を表したい。

みずのしょうご（臨時職員・京都大学大学院生）